

701

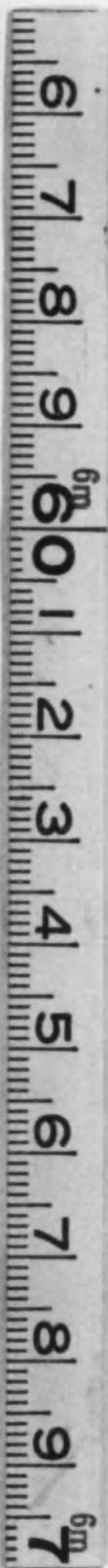
特251

915

男爵井上清純閣下講述

明朗會講演集

明朗會本部



始



特251  
915

明朗會講演集 第七號

國史を貫く大精神 其の六

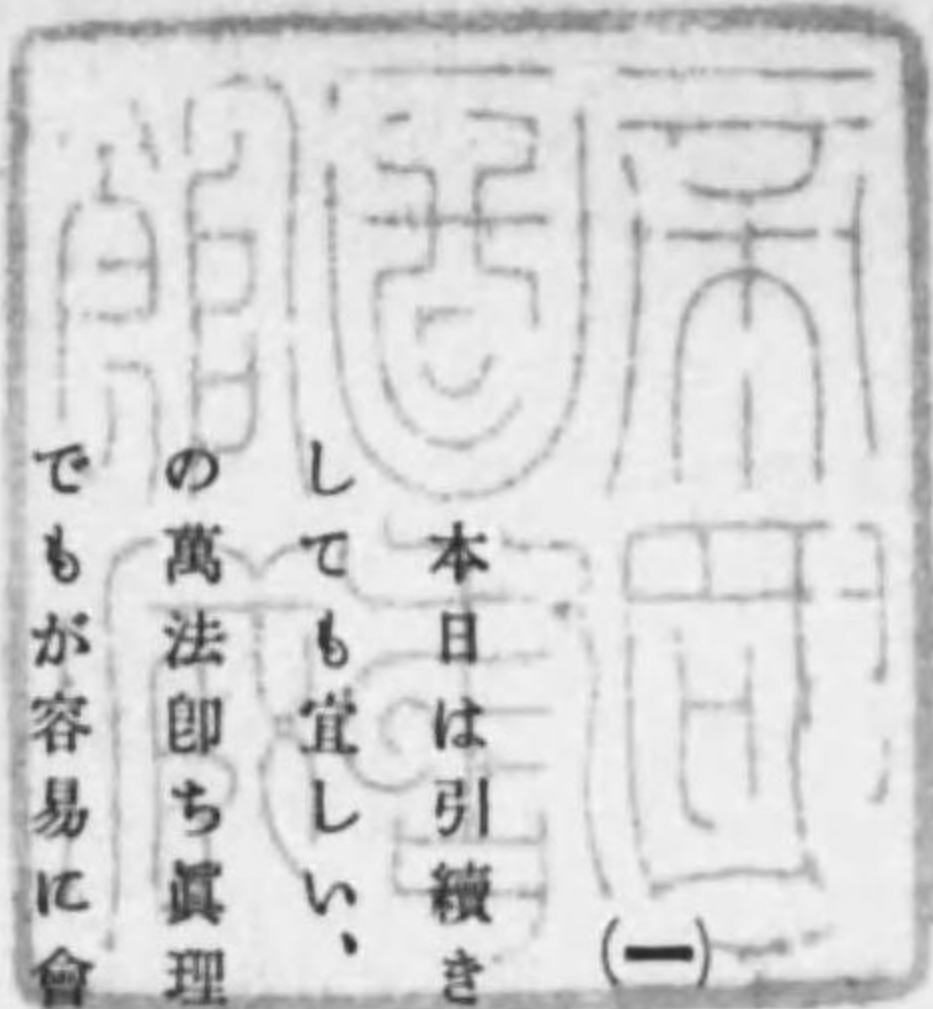
二月二十一日

男爵 井上清純閣下

講演



(一) 國と人と教



本日は引續きまして「國と人と教」といふ題で申上げたいと思ひます。是は國と人と法と申しても宜しい、當今は法といふ言葉を法律の方にばかり用ひて居りますが、法といふのは宇宙の萬法即ち眞理の當體を指し、其眞理を人に傳へる所に於て教といふものが存する。眞理は誰でもが容易に會得するといふわけには參らない、それを教として、初めて一般の人が之を掴むことが出来ることになる譯であります。此國と人と教此三つの關係は非常に大切な事柄でありまして、國といふものは人類文化に欠くべからざるものであります。西洋流の學者は學問に國境なしと申して、教と國と人とが離ればなれになつて居りまして、國家を主とすれば國家

萬能となり、教を重すれば教萬能となり、人を本とすれば人萬能となるのであります。それは彼等が國と人と教との微妙な關係に就て明確なる所の見解をもつて居らないからであります。こゝに西洋人が如何に偏傾した思想の所有者であり、圓滿具足の思想に缺けて居るかといふことが分るのであります。國と人と教、此三つの關係はどれを頭にしても考へられるのであります。合計九つの關係が生ずると思ひます。

人を上にして人と國と教、或は教を上にして教と國と人、此三つに就て色々配列を仕直しますると九つの關係が生じて來るのであります。天台大師、大師は東洋哲學を大成せられた恐らくカント以上の哲人でありますが。この天台大師の申された如く此九つの關係を了解し、十番目に國と人と教といふものを纏めて、此三つのものが伊字の三點と申しまして、縦でも横でもなければ一、二、三の順序でもなく、三つが竟に一つになるといふ微妙な關係を生ずるものであらうと思ふのであります。唯國が有難いといふ、國家萬能論に引掛つて、教の必要なことを知らなかつたり、人の幸福を念じて、國家の盛衰を忘れたり——是は大體社會主義者の共有思想であります。又教を弘めることに専念して國を軽く見たりして——宗教家特に基督教徒にその弊を見るのであります——綜合善に達することが出來ないといふことは現代の憾みであります。然るに我國に於きましては昔から三つのものは三つにして一つ、一にして三、實に微妙

なものであるといふ風に考へられて來たのであります。「立正安國論」に「夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し、國亡び人滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや、先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし」と最初に教を出發點にしまして、「國は法に依つて昌へ」と申されて居ります。是は國が隆昌せん爲には學問宗教を吟味しなければならぬといふのであります。次に人を表てに見まして、「法は人に因つて貴し」で、精巧なる近代兵器も皇軍を俟つて其全能を發揮し得られる如く、儒教でも、佛教でも、我國に於て初めて其眞髓が發揚せられた次第であります。聖德太子は我國を大乘相應の地と仰せられて居る。大乘教のやうな立派な教が華咲く國である、日本民族は充分之を消化することの出来る偉い民族であるとお考へになつて居られたのであります。又立正大師は「本門直機」と申して居ります。「本門直機」といふのは方便の教などは要らない直ちに實大乘教の本門を學ぶ資格のある民族であるといふことでもあります。支那人の如く國の事より自己の利害を先に考へるといふやうになつて了つたならば、孔孟百家の説があつても全部が腐つて了ふ譯であります。

今度は國の方を頭にしまして「國亡び人滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや」。此場合には國と人とを第一、第二に於きまして教は第三に置かれて居りますが、此文章は一句々に捉はれないで、それがどれも一つになる。又どれでも三つになる。此三つの微妙な

關係を理解するといふ事が、總ての問題に付て法華經の教へて居る所の妙法であるのであります。所が今日は國が大事だと考へて居る立場の人と、人が大事であると考へて居る立場の人は相當に多いのでありますが、教が大事だと考へて居る立場の人は少ないやうであります。併しながら此三つの關係を適當に理解しない限りに於きましては、健全なる國家が成立つものでもなく、又人々の幸福繁榮を希望することも出来ないものであります。今次の事變で多數の總體を戰地に送りまして、支那全土を席捲しつゝあるのは我が豊富なる人の力にして、初めて之を能くし得るのであります。我國が七千萬人の大人口を有して米英佛などを凌駕して居るのは非常な強味であります。併しながら年々百萬近く増して行く大人口の強味は、能く其國民に安住の地を與へて、之を教化演練するの國力があるからであります。國家を構成して居る所の人といふ者が衰へ、教が間違つて居つたならば其國は決して健全なる發達をするものではないことは、支那が四億の大衆を抱へて今日の體たらくであるのを見れば明かであります。人間を良くして行く方法といふものは教を以て導く以外には斷じてないのであります。悪くなつて來たからというて法律を以て罰したり、叱り飛ばすやうなことをしたならば、却つて改過遷善の功を奏するものではないのであります。人々皆其本性に於て貴いものを持つて居るのである。其人格を認めて、教化を與へて行くといふのが我が國風であります。日本臣民は老若男女、貴賤貧富

職業の如何を問はず悉く天壤無窮の皇運を扶翼する天職を賦與せられて居る。それ故に古來大御寶と呼ばひ天の益人と稱されて居る。自分の子であるからといふて、天子様からお預りして居る大切な御寶といふことを忘れることは出来ない。古來其名を汚すことなき忠良の臣民たれと教育せられて來た譯であります。就中國家的の仕事に参加する人々は第一に人格の向上に努めなければならぬ。政治家とか、教育家とか、軍隊とか、警察官とか、世の保護者となる地位に居る人々が、一番目醒めて教を尊重するといふことに來ない限りには、國家は決して健全に於らないものと思ひます。

明治天皇の御製に

國のため高きほまれを得し人の

身をあやまたむことなくもがな

まつりごとたゞしき國といはれなむ

もののつかさよちから盡して

名譽を持つた人が足を踏外づすことが無いやうにそれを戒められて居ります。今度は人間本位といふことに引掛つて居る者が、國などはあつても無くつても人間が本である。人間の都合の爲に國家といふものがあるといつて、所謂人本主義と稱へて人間々々といふ事のみ考へて

居る者が世の中に相當あります。大體社會主義を奉ずる者は國よりも人を重く視る、英米デモクラシー思想がそれである。それが究極無政府共產主義となるのでありますが、必ず國を離れて人々の幸福といふものはない。人を愛して國を思ふことの出来ない人は實は思想的片輪と申さねばなりません。尙ほ人を思へば教に想到しなければならぬ。近頃國民體位向上と申しまして、肉體の事のみ論ぜられて居りますが、太公望は戦をするには何よりも人間の魂を鍊へて行かなければならない。それには道を重んじ、教を貴ぶ心から出發すべきであるから、戦の勝利の根本は教を大切にすることでなければならぬと申して居ります。彼の六韜三略虎の巻には、「魚にして水を離るれば死す、人にして道を離るれば死す」と戒めてあります。是は實に千古の格言でありまして、教を重んぜざる時そこに人格なく、人格なき時國家はないのでありますから、人間といふものを深く考へた時には、國を知り教を思ふといふことにならなければならぬ譯であります。

今度は教を中心にして考へた時に、教と自分さへあつたならばそれで事足りるやうに思つて居る輩があります。西洋の宗教觀念は大體左様であるが、國を忘れた宗教が何の價値があるか法を知り國を思ふといふことでなければならぬ。人類文化は國家組織に依つて發達するものでありまして、支那の如く國が衰へ、國が態度を過つといふことになつたならば、數千年の文

化も、國民の幸福も悉く破れて了ひます。國民個々として如何にセントルマン的でも、國家としての態度が不正不義であつたならば、其罪は國民全體が受けなければならぬ。それ故に教は國全體の行動を指導しなければいかぬ。所が今の教の殆ど總てが個人を善人にするにとばかり考へて居りますが、個人の人格も國家全體としての態度も、そこに一貫した所の正義を行はなければならぬ筈であります。それ故に國家の一番大事なもの正しき教を遵奉することになければならない、明治以來の教育の方針が人格完成にあつた。立身出世を目的にして居つたやうに見えるのであります。是は個人主義から出發した考へ方であつて、吾々は今や此教育の方針を改めねばならぬ時が來たのであります。天業を恢弘して天下に光宅するといふ天子様の御大業を扶翼し奉ることが出来るか否かに依つて、吾々の價値が決まるのであります。徒に立身出世を望む必要はない。時世時節に依つて高位富貴を授かるかも知れませぬが、又授からぬでも宜しいのである。人生の目的をもつと高處に置くやうにしなければならぬ。

轉輪聖王は太子に位を譲られる時に——轉輪聖王といふのは前にもお話した通り佛教に於て謂ふ所の理想的の王様を指すのであります。——「吾々祖先から傳へたる遺訓といふのは唯一つである。假令此領土の一部が割かれることがあつても、又藏の中の寶物を失ふことがあらうとも、吾々の祖先以來大切に守つて來た所の此人の心を教へ導く正しき教、正しき道といふもの

を一點も瑕を付けぬやうに守つて行くことが、爾の第一の使命であるぞ」と訓戒をされて居るのであります。明治天皇が皇祖皇宗の遺訓と仰せられ、教育勅語に「斯の道」とありますのは、實にかくの如き意味を含むものでありまして、決して領土でもなければ、藏の中の寶物でもありません。國民の精神を導き國家の行動を規範する所の道であり、法であるのでありますから、「爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸厥ノ徳ヲ一ニセン」と仰せられて居ります。此教育勅語の結語として、天皇と臣民とがその徳を一にしたいと希はれたのであります。それ故に此教育勅語には御名御璽だけでありまして、大臣の副署はない。天皇御自身の御希望を述べさせ給ふたのであります。天皇としての道も、臣下として行ふ道も「咸厥ノ徳ヲ一ニセン」と仰せられて、此國を土臺として人類の文化に寄與せんとする所の大理想に向つて、相共に進まうではないかといふ御希望を述べさせられた。此國に理想文明を打建て、日は東から出て西に照すが如くに全世界を光被し、全人類を救済するといふ大理想の下に、「億兆心ヲ一ニセンコトヲ」御願望し給ふたのであります。

教を人と國から切離して唯教だけを守る。或は國を教から離して國だけを守るといふことは、洵に卑しい考でありまして、教は教會や學校の爲にのみあるのではありませぬ。僧侶や教師の爲にのみ存するのではありませぬ。人の爲、國の爲だといふことになつて、初めて教の眞價が

輝くのであります。人は人教は教というて居るやうな學問や宗教の中には、何の光も見出すことは出来ませぬ。國を忘れ、教を忘れて居る人の中には生命といふものはなく、蛆蟲が湧いて居る。人を忘れ、教を忘れるやうな國は支那と同様直ちに滅亡してしまひます、滿洲事變が起らうが、又今回の如き開闢以來の大事變が起らうが、超然として學問の獨立を標榜し、象牙の塔に立籠つて、百萬の同胞が勅命を畏み屍山血河の間に天の沼矛ヌボコとなりて漂へる大亞細亞の修理固成に、世界の建直しに、家を忘れ身を惜しまず、只管に奉公に専念せる學國の動きにも頓着せず、之を冷眼視して居た我國最高學府と名付ける帝國大學内に、最近一大動搖が起りつゝあるといふことは當然の事ながら、頗る喜ぶべき吉祥と申さなければなりません。彼等が今にして自覺することがなかつたならば時代の落伍者となり、次代の指導者とはなり得ないのであります。國が良いからと申してそれだけでは決して安心して居る譯には参りませぬ。曾てレーニンレーニンは「其國の歴史的に養成した國民精神などといふものは、それが容易に變らぬといふのは實に空頼みといふものである。之を誘惑するに途を以てし、煽動するに方法を以てするならば十年を出でずして激變せしめ得るものである」と豪語しましたが、其言讖を成して程なく大正十二年の大不祥事が起りまして、人をして悚然たらしめたのであります。人間の心といふものは縁に随ふて變化するものでありまして、恰も水晶の珠が太陽の縁を取れば火を生じ月の縁を取

れば水を生ずるといふが如く、人間は縁位恐しいものはない。極く哲學的に言へば、人間其者の本性は善でも悪でもない、無定性である。縁に依つて善とも悪ともなる、それ故に縁といふものを貴ばなければならぬ。縁の大なるものは何であるかといふと教である。それ故に教といふものが大切になつて來るのであります。又環境といふものが全部縁であります。環境を良くしなければ立派な子供は斷じて出て來ない。親父さんが酒を飲み喰つて居つた家庭からは遂に立派な人間は出て來ない。縁の大なるものは教である。教の善惡に依り曩の良民灘波大助は、大逆人と激變して了つた。是は二年で以て斯う變つて了つたのであります。忠義の念の厚い長洲の士族の家に生れ、嚴格なる家庭に育てられた灘波は、「改造」誌の確か河上肇の論文を見て、二年間に心の變化を起して了つたのであります。法華經の方便品に「法は無性なり佛種は縁より起ると知めず、是の故に一乘を説き給ふ」と申して居ります。「法は無性なり」といふのは一切の萬法——森羅萬象は悉く定性なしといふことであります。黒といふことも白といふことも出來ない。コールタールのやうなあんな黒い物からナフタリンのやうな白い物も出て來る、香水も出て來る譯であります。「佛種は縁より起ると知めず」で人間には佛性といふものがあり、神性といふものがある。併しそれは縁が無ければ起らぬ。佛様はちやんと其事の道理を知つて居られるかも善縁を興ふるといふことに骨を折られた。善縁の中で最も善いものが一乘の教であります。

ありまして、此一乘の教を説き給ふといふのでありますから、洵に理のつんだ説明である。經濟の事も法律の事も、否一切が渾然と一乘の教となることに依り、人の心は善くなるのであります。

今日は總ての事が、即ち經濟は經濟、政治は政治、學校は學校と別個の指導精神に依つてやつて居る譯でありますから、人間の人格といふものが支離滅裂になつて居る。是をどうしても一つのものに纏めなければ眞の日本の力といふものは出て來ない譯であります。どうしても總ての力を盡してもつと良き思想言論を熾にし、詰らぬ新聞や雑誌などは世の中に存在するところが出來ない位に膺懲しなければならぬ。飽迄も嚴肅に尊皇護國の大和民族の特色を發揮して行きたいものであります。此國と人と教といふことは非常に面倒な事柄でありますから、簡単に今のやうな説明で止めて置きたいと思ひます。

## (二) 鎮護國家の妙典

鎮護國家の妙典とは主として思想戰に對し皇國を護る所の教といふことであります。西洋文明の根柢を成すものは希臘の萬有流轉の説でありますが、此萬有流轉の説といふのは、總ての物が遷り變つて止まることがない、萬物は總て流轉して常住するものではないといふ説であ

ります。總てのものは一時限りのものであると考へる思想であります。この萬有流轉説でもキリスト教の創造説でも、ダーウインの進化論でも皆、本無今有の無常の思想であります。無常とは常住でないといふことで即ち遷り變つて了ふといふ思想であります。斯の如き思想に依つて成立した國家は常に生じ常に滅する運命にあります。西洋歴史は斯の如き國家の生滅起覆、有爲轉變の記録に外ならないのであります。文明の根柢には道德と哲學と宗教とが融合一體となつて居るべきであります。西洋文明は哲學と宗教とが調和を缺いた所から出發した文明でありますから、智力の進む所に信仰を失ひ、信仰のある所に知識を否定する傾きがありました。今日は此弊害が著しく現はれ、耶蘇教の信仰も非常に衰へて了つて居るのであります。更に學問の上に於て進化論は人猿同祖に出發し、其進化の法則を自由競争に置き、生存競争を力説したのであります。それが有ゆる思想の根柢に横はつて總ての競争を是認して、優勝劣敗、弱肉強食の考が強く現れた爲に、國內にも國際間にも修羅界を現出せしめたのみならず、人々より敬神崇祖の觀念と宗教の信仰を奪つて了つたのであります。又一方に科學思想が跋扈して居りますが、科學は實驗以下の思想でありまして、人の魂や神佛のことは實驗に映らざるが故に之を嘲けることになり、遂に總ての問題が唯物傾向を辿つた爲に、人心が墮落し弊害百出するに至つたのであります。今日西洋の道德の標準は實驗科學に置き、忠孝の大義に置かないので

ありますから、今日の善といふことも明日は惡となるかも知れません。始終道德の標準が變るのであります。畢竟西洋の文明は根本に於て哲學と宗教とが二分されて居た爲に、一切の根本を失つて居るのであります。

カントは二元哲學を唱へ實踐批判に於ては神ありと認めなければ道德が潰れて了ふと考へまして、神ありと認めたのであります。併し理性批判から見ると神は消えて了ふのであります。此實踐批判の二元の哲學を唱へ出したといふことは、歐洲の思想界を紛亂した所の本となつたのであります。更に萬有流轉の思想は遠く希臘のヘラクレトスが唱導せし所でもあります。若し一切が唯流轉して一物として止まることなく、川の流の如く人其足を再び元の流に浸し難しとするならば、何も依り所のない所の夢幻泡沫の世となりまして、一切の道德が破壊され、光明なき虛無世界が残る、虛無思想はこゝに胚胎するのであります。進化論の生存競争といふのは誤つた思想でありまして、吾々が人類社會を作り文明を作るに付きまして、優勝劣敗といふことを原則とすべきものではなく、道德宗教の精神を本にして社會を作らなければ、利害の衝突から權利を争ひ利益を争ふ所の争奪の巷と化して、如何なる方法を講じましても、一勝一敗いつ迄も其慘害を脱し得ないことになるのであります。左様な社會を法華經は「畜生の境界」と申して居ります。聖徳太子が「和を以て貴し」とすると仰せになつた言葉は、日本精神の中



核でなければならぬ。又唯物思想を基礎にしまして文明を作ることの謬見なる事は申す迄もないことでありまして、神も無く魂もないといふことは、之を釋尊は斷見と申して、有ゆる悪思想の根源であると誠に居ります。左様な斷見を本として國政を治むることが出来たならば首でもやると、釋迦は斷言して居るのであります。日本精神は此唯物思想を強く排撃して居ります、唯利益の分配を論じ、米の配給を論じて、高傑なる道德宗教を嘲つたならば、それは蘇聯コミンテルンの思想でありまして、皇國精神とは相反するものであります。

更に儒教の依據とする易學はどういふものであるか、其名既に變易を示し、萬有流轉の法則を解明せんとするものであると看做されて居ります。若し然りとすれば儒教には結局人其規範を見出すことを得ざることになり、忠孝の大義も崩れ、國體の大本も亦動搖せざるを得ぬといふことになります。それ故に左傳に「社稷に常奉なく君臣常位なきこと古より以て然り」といひ、堯舜の禪讓に倣はしめた爲に、叛逆者の悪用する所となつて、禪讓放伐相繼ぎ、易姓革命踵を接し、支那の歴史は革命擾亂の歴史となつたのであります。易學の大家根本通明先生に疑を發し（此通明先生は明治年間に年八十五歳かで亡くなられた易學の大家であります）沈潜二十年遂に易は變易であると同時に不易である。常住である。萬物流轉するも天地、君臣、父子の位、忠孝人倫の道に至つては斷じて易ゆべからず、易は天地を經し人倫を理め、而して王道

を正し天子一系の道なることを明かにしたものであると喝破し、支那の易學は日本に於て初めて其本領を發揮することが出来たのであります。斯ういふ所が日本人の偉い所であります。遊佐木齋（木齋は仙臺の儒者であります）と室鳩巢との間に交はされた所の神道に關する文書は、此問題に觸るゝ所が多いと思ひますから、其問答の一端を申述べて見たいと思ひます。鳩巢は「物始めあれば必ず終りがある、是れ天地の常理である。故に國建てられた以上は必ず亡ぶのである。されば天壤無窮の國體のあるべき道理がない」と論じたのは、萬物流轉して止まざるを宇宙の原則とし、「國家も亦興亡あるを免れない、天子の位も亦萬古一定のものでない」として、結局革命を承認したものであります。徳川時代の儒者には斯ういふ考を持つた人が随分多かつたのであります。學問に國境がないと唱へ、専ら外國の學問に沈溺し、日本の歴史や傳統を無視して之を顧ることを知らない、世界主義を奉じて最も「我國」の二字を忌み、御神勅を信ずることが出来ないで、國體を尊重することを知らない、外面は之に和するが如くであるが、而も内心で之を嗤ふ所の滔々たる學界、思想界の風潮を殆ど其儘代辯するものでありまして、邪説の横行し、人心を毒する昔も今も少しも變りはないといふことに暗嘆を禁ずることが出来ないであります。今日は社會情勢を云爲する大勢順應の時代と申して宜しい、大勢順應論は根本に於て萬物の流轉を信じ、物總てうつろいゆき、確乎不拔の基準といふものがないのであ

るから、流れの儘に随ふを以て賢明とするのであります。舉世滔々大勢に順應して處世の道を考へるならば、一朝變到つて國體を擁護する由はないであらう。木齋は鳩巢の言を反撃して何と申したかといふと「萬物流轉は如何にも宇宙の法則であるが、千萬歳を経ると雖も天、地に下らず、地、天に上らず、我が神州天地と共に開けて後世の建國ではない。隨て滅亡といふやうなことは斷じてない。されば資祚は天壤と共に窮りなく、無比の國體威を以て奪ふべからず、力を以て争ふべからず、逆を以て立つ可らず」と論じて居ります。後世の建國でないと言つて居ります。是は實に大切なことでありまして、二月十一日に建國祭といふことをやりまするが、此建國といふ言葉は斯ういふ哲學的の意味から言へばどうも適當ではないやうに思はれます。日本は神から授けられた國で後世人によつて建てられた國ではありませぬ。二月十一日は今から約二千六百年前に、神武天皇が橿原神宮に御即位を遊ばされた日でありまして、其日に國が建てられたのでもなければ、其日から國が肇つたのでもありませぬ。それよりずつと以前、悠久の昔に天照大神によつて國を開かれたのでありまして、又それが吾々の信仰でなければならぬのであります。明治天皇は神武天皇の御即位日を紀元元年と御治定遊ばされ、それ故に紀元節と稱せられ、建國節とは御仰せにならなかつたのであります。臣民が勝手に斯ういふ大切な御祭日の名前を付ける事は許されてない筈であります。此點に付て考慮を要すると思ひ

ます。木齋先生は流石にその點を言はれて居るのでありまして、我國は神授の國であつて、御勅語の中にも「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられ、三千年や四千年前のことではない。宏遠といふ言葉が使はれて居ることに深く注意しなければならぬ。哲學的に申せば始めなき故に終りはない、始めがあれば終りもある譯であります。我國は始めなき昔神から授けられた國であるといふ信仰に立たぬ限りに於ては、天壤無窮の神勅を奉ずことは出來ないのであります。木齋の學こそ是ぞ正しき日本の學問であり、世界の基準たらしむべきものでなければなりません。

更に此常住不滅の思想を強く裏付けて居るものは法華經であります。法華經は一經の中に大哲學と大道德と大宗教とが融合せられて居りまして、之を根本として佛教を開顯し、更に世法を開顯し、(世法といふのは佛法に對し世間法をいふのであります)之を統一するのであります。彼、彼の如來壽量品に「如是、我成佛已來、甚大久遠、壽命無量、阿僧祇劫、常住不滅」と説かれてありますが、此阿僧祇劫といふ言葉は非常な大きな數を現はしたものであります。今日の言葉の中には此數字を現はすものはない。桁が違ふのであります。劫といふのは千疊敷位の大きな石を千年に一廻大きな鳥が天から降りて來て、其羽で其石を擦つて、又千年経つてから降りて來て其羽で其石を擦する、斯くして其大きな石がすっかり磨滅してしまふ迄を一劫とい

ふのであります。一劫でも大變なものであります。それを無量阿僧祇劫といふのでありますから大變な數であります。到底考へることが出来ない。人間の思想は到底そこ迄は伸びないのであります。釋尊の算數的思想といふものは非常な高遠なものであります。今日の算盤の拓には乗らない。それを「甚大久遠」と云つて居るのであります。國ヲ肇ムルコト宏遠ナリ」といふその宏遠といふ言葉と同じであります。この法華經の思想は西洋や支那の學說に較べると、遙に高遠なる説であります。かゝる高遠なる思想でなければ日本の國體は眞に説くことが出来ない。法華經壽量品を開いて見ますれば「常在常住」「實在不滅」等の言葉の羅列でありまして、方便品にも「此法、法位に住して世間の相常住なり」と申して居ります。非常に難しいことを申上げるやうであります。私は先年千阪海軍中將と御一緒に楠公の史蹟を巡拜した時に、千阪氏は法華經に「此法法位に住して世間の相常住なり」といふ言葉があるが、一體是はどういふ意味の言葉であらうか、楠公は「七たび人間に生れて此賊を滅せん」と言はれたが、それと何か關係があるか、楠公は常に法華經を戰陣の間に寫されて居られたといふが、どうも其思想と七生報國の思想とは深い關係があるやうに思ふがといふことでありました。之を國に譬へて申したならば、法位に住してといふことは今は足利高氏が暴逆を逞しうして居つて、國體が顛倒して居るが、若しも此國體が法位に住して國の正しき姿に還つて天子様が上に御居で

になつて、臣下が下に下がるならば世間の相常住なりで、天壤無窮であるといふことになる。かゝる信仰をもちまして南朝の忠臣方は敢死勇戦された譯である。非常に深い哲學からあの忠義が出て居るのであります。是は皇國禮讚の言葉とも申すべく、之に依つて初めて我が悠遠なる國體を説明し、裏付け得るのであります。

聖德太子は法華經義疏に於て常住といふことは、「皇祚之隆、天壤無窮」を説明せるものでありと仰せられて居ります。述門方便品を中心とする所の諸法實相の哲學の教訓する汎神論と、本門壽量品を中心とする本佛論との統一神の思想は、我が神道と一致するのであります。非常に難かしいことを申すやうであります。宗教は一神教、唯一神教、統一神教と三つに區分することが出来るのであります。耶蘇教は唯一神教で、天理教などは一神教といつても宜いでありませう。一つの神様を取つて來て其神様に信仰を捧げる宗教であります。耶蘇は絶對唯一の萬能の神様を取つてそれに信仰を捧げるのであります。其外に統一神教といふのがありまして、法華經の教は統一神教であります。それは丁度月は一つであります。萬水に影を投ずる時は萬の影が映つる。此一つの月が本佛でありまして萬の影が述佛であります。法華經の明示する所によると阿彌陀如來、藥師如來、大日如來等々は、天の一月が萬水に影を映した所の述佛であると申すのであります。我國では天照大神を中心にして八百萬の神々を認める八百萬の神

々を信心して居りましても其の神々を通して天照大神様に歸一し奉るといふのが、大和民族の信仰でなければならぬ。汎神の哲學的基礎に立ちて統一神と認める之を指して統一神教と申すのであります。

今や世界の宗教は汎神を土臺にした所の哲學を含んだ宗教でなければ遂に打破られて了ふといふので、統一神教の方に向つて進みつゝあるといふ趣向であります。耶蘇教は唯一神教であつて、哲學的の基礎を持たない。即ち汎神思想を持たない爲に根本が崩れ掛つて居る。唯一神教は我が國の八百萬の神々を認めることが出来ないこの點非常に偏狹になつて居ります。佛教の統一神の思想と神典の垂訓する統一原理とは、王法佛法冥合する所以であります。聖徳太子は法華經を「萬善を取り合して一因となすの豊田」と仰せられ、大楠公は「護國の依據」と申されて居ります。長くも後醍醐天皇が延元四年八月十六日吉野行宮に於て、御右手に劍を按じて南山に崩御遊ばしました際、御左手に持たせ給ひしは、正しく法華經第五の卷であつたのであります。

明治天皇の御製

萬代の國のしづめと大空に

仰ぐは富士のたかねなりけり

### (三) いろは歌と日本人人生觀

今日は「いろは」歌の意味合が影が薄らいで居りまして、小學校でも之を教へないで、唯文字の符牒のやうになつて居ることは、洵に慨歎すべきことと申さなければなりません。是は排佛毀釋から來た弊害であるかと思ひますが、「いろは」歌の中には日本人の大切な人生觀が織込んであるのであります。八絃一字の人生觀ともいふべきものを幼さい中から子供の頭に植付けるといふことに努めた。吾々の祖先は實に偉かつたと考へなければならぬ。大和の法隆寺の本堂に推古天皇御遺愛の玉蟲の厨子が安置されて居りますが、其厨子の須彌坐の四面に佛畫が密陀僧といふ油繪具で描かれて居ります。是は我國に現存して居る最も古い油繪と云はれて居りまして、其頃には西洋にもまだ油繪は發達して居らなかつたかと思ひます。それは今の繪具とは少し違ふやうでありますが、やはり油繪で、其右の方に描かれて居るのは雪山童子の本生譚であります。其模造品が上野の博物館の表慶館に在りますから御覽になつた方があると思ひます。此雪山童子といふのは佛道修業者でありまして、其頃印度の哲學者は——山中で修業して居りました。雪山童子もヒマラヤ山中で善知識を求めて修業中に、其耳に美妙なる聲で一つの歌が傳つて來たのであります。それは「諸行は無常なり是れ生滅の法」といふのであります。是

は分つたが其次の句が分らない。誰が何處で歌つて居るのか分らないので色々探して居りますと、羅刹といふ鬼が其歌を歌つて居ることが分りました。そこで羅刹に對して其次の句を聴いたのでありますが、羅刹は自分は腹が空つて居るから、人の肉を喰はなければ次の句は歌ふことが出来ないと申しました。雪山童子はそれが爲に人を殺すといふことは固より出来ませぬので、自分の臍を齧げるからといつて、次の偈を聴くことになつたのであります。是は「我不愛身命但惜無上道」といふことを物語として現はしたものであります。そこに於て羅刹はお前の肉を呉れるといふならば聴かしてやらうといふ固い約束の下に、次の「生滅滅し已つて寂滅を樂と爲す」といふ句を教へて呉れたのであります。そこで雪山童子は大變喜びましたが、此歌を今死んで行く自分が獨り知つて居ても惜しいので、其附近の石壁や木片に書留めてから、約束通り身を躍らして羅刹の口中に投じた。其姿が厨子の中に描いてあるのであります。所が羅刹は忽ち帝釋天に姿を變じまして之を救つたといふ涅槃經の中にある有名な物語であります。此十六文字の偈は大乗佛教の眞髓を傳へたものであります。平安朝時代に之を採つて「いろは」歌が作られたのであります。作者は弘法大師だといふ説もありますが、その所は判つきりしないのであります。こんな有名な歌が誰が作つたのか分らぬやうなことも亦日本精神の特色の一つであります。自分といふものがない。だから自分の名を後代に留めることすらも遠慮し

た譯でありませう。今日遺つて居る數々の名刀の中にも、銘の刻んで無いものが澤山あります。或は國寶になつて居るやうな立派な畫の中にも、誰が畫いたのか落款のないものが澤山あるのは、大和民族の床しい心情が現れて居るのであります。此「いろは」歌も誰が作つたか分らない。而も是は原文よりも一段巧妙なる作歌のやうに思ふのであります。

此「いろは」歌は頗る整うた所の人生觀を教へたものであります。現代の思想の動搖も根柢は此人生觀の不徹底から來ることを考へた時に、古人が「いろは」歌を以て文字の基調としたことは a b c d の如き單なる符牒とは其選を異にし、洵に意味深長のものあることが窺はれます。日本文明には其處に貴い所がありました。古今に通じて變らない大眞理を抑へて居ります。之に反して西洋の主張は洵に上滑りのことを唱へて居るやうに思はれる。それ故に變化常なき有様でありまして、倫理でも進化の半面の用道、即ち運用の方面だけしか知らない。倫理の根柢に於ける體道の不變即ち「古今ニ通シテ譯ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」といふ道德の大本を知ることが出来ないで、時と處と位置に依つて變化する側だけを以て、道德の全部と思つて居る。茲に西洋文明は道義的墮落に陥て居ります。一切のものには二面性がありまして、人間の心に致しましては變らない心の本質と、時處位に依つて變化常なき所の心象との二面があります。然るに其動いて行く方だけが心であつて、變らない所の不變の方面は知らぬといふ

ことになりすから、そこで刹那生活といふやうなことが起つて来る。現代の生活は皆刹那生活であります。「ころ／＼と心に迷ふ心こそ……」といふ歌があります。心には本當の心と其本當の心を迷はす心との二つがあるのであります。そこで心には二つあるといふことを常に自分で考へて見て、成程今誘惑に打克つ心と、誘惑を仕掛ける心とが戦つて居るなといふことを感付かなければならない。世の中には悪魔といふものが存在して居ります。即ち正しいことや善いことを妨害する一切の有形無形のもの之を指して魔といふのであります。其魔の存在を知らなかつたならば、色々の不幸が次から次へと起つて来る。是は非常に恐いものであるといふ事を考へて、常に用心をしなければならぬ。少し隙があつたならば必ず魔軍がやつて来る。家の中に少し隙があつたならば、必ず病といふ魔がやつて来る隙を與へてはならぬ用心が大切である。此用心といふ言葉は、火の用心などのやうに軽く使つて居りますが、本は華嚴經から出て居るのであります。用心第一と申して一切の場合に用心といふことを説いてある。何からでも人間の精神は立派に働き出すものである、教は決して出物の中のみにあるものではない。自分が夜寝る時分でも、今安らかに布団の中に寝られるが、併し路傍に彷徨つて今夜宿る處のない人もあらう、或は病に胃されて眠る事も出来ない者もあらう、どうか多くの人々が安らかに眠に就く事が出来るやうにと、掌を合せて多くの人を慈念して眠に就く、それが用心

であるといふやうに説いてある。もつと深く考へれば諸法實相と申して、現れた事物の裏には實相がある。其實相を見なければならぬといふことが用心と云ふことである。然るに不變の心といふものは知らぬといふ事になりますから、そこで刹那生活といふやうなことが起つて来る之を眞面目に眞理だと思つて居る者もあります。日本の傳統的な良風美俗を破壊して、新しい村などと云うて新社會を建設しようとするのも、或は共同生活と稱して夫婦の制度を破壊しようとする思想も、皆物事の變化の側だけを見て、不變の側を忘れるから、さういふ間違ひを仕出かすのであります。所謂古い、新しい、保守だ進歩だ、右だ左だといふのも、總て物事の兩面を知らざる所から来るものであります。日本文化の長所は不變の上に變化のあることを見に行くやうになつて居ります。それ故人生觀の根柢にも一貫する大本を抑へようとして居ります。道德に就ても、社會に就ても、國家に就ても皆さうであります。夫故夫婦の盃をする時には、既に死の覺悟迄して行くといふことになります。此點は此間日本に來た獨逸のファンク博士が、日本の精神を映畫に取入れんとして非常に苦勞したやうであります。あの「新しい土」といふ映畫の中に、日本の婦人道德を織込んで居るのであります。日本の婦人は如何に結婚を神聖視して居るか、實に驚くべきものがあるといふことを感歎致しまして、之を其映畫の中に盛込んで居るのであります。孔子も「端を夫婦に發して峻として天を極む」と申して居ります

通り、一切の人類の道徳は、夫婦の關係から發して居るのでありまして、男女の道徳の頽廢は直に人類文化の崩壊であります。それ故に婦人の道徳といふものが一番大切であります。若しも是が破れたならば人倫は頽廢し、文化は破壊され、國家も滅亡するのであります。今や米國も佛蘭西も此點により滅亡の道に頻して居る。是皆端をそこに發して居るのであります。獨逸は此處に氣が付きまして驟然として起ち上つた。それが今のナチスの姿で、獨逸は今其源流を日本に汲まんとして非常に骨折つて居る譯であります。外の國にはヒトラーは何人をも出して居りませぬが、日本文化を汲取る爲には、彼は三人の股肱を送つて居る。今其人達は細心の注意を以て日本の精神を汲取らうと骨を折つて居ると申すことである。之を見ましても將來人類を救ふものは日本文明であるといふことが分ります。早晩日本に全世界の留學生が集まつて來る時が來るでありませう。さうして人類の文明は斯の如く建直さなければならぬといふ指導原理を我國から教はることになるであらう。大和民族は滿洲に於て、北支那に於て、中支那に於て、其模範を示さなければならませぬ。若しも大陸に進出せる人達がさういふ自覺がなくて、唯彼處で享樂を貪り、私利を漁り、不正の事をやるならば、天罰立ち所に下りて、日本は太平洋の浪の下に覆没してしまひます。夫婦の盃をする時に既に死の覺悟をする、それ程一貫した思想に日本人といふものは立つて居るのであります。「先王の道を行ふて過つ者は未だ曾て之れ非

らざるなり」で、古今變らぬ眞實を抑へた者には保守も進歩も、右左もない。日に新にして而も萬古變らぬものがあります。其急所を抑へた所に、日本文化の特長があるのであります。此「いろは」歌は

色は香へど散りぬるを我が世誰ぞ

常ならむ。有爲の奥山今日越へて

浅き夢みし酔ひもせず。京。

といふのでありますが、「我が世誰ぞ常ならむ」迄が前段でありまして、「諸行無常なり是れ生滅の法」といふ人生の儚い有様を示し、「有爲の奥山」から下は即ち「生滅滅し己つて寂滅を樂と爲す」といふ、修道に依り人生觀の確立することを教へ、終ひの「京」の一字は現在に於ては歡喜法悅の生活、死後は神となり佛となつて行くといふ所の、此世には歡喜の花開き、死して成佛の實を結ぶことを京の都に譬へたのであります。「いろは」歌は此三段に分れて居りますが、最初の「色は香へど」といふのは人生の醒めざる生活はどのやうに榮へて居つても生者必滅と申しまして、必ずそれは滅びて行くものである。色といふことは目と鼻と耳の三つが關係して居る。色の衰は心であります。「色は香へど」と申したのは眼と鼻との關係で言ふのでありますして、人生の快樂に酔うて居る所が色は香ふといふ事でありまして、それは直ぐ散つて行く

のであります。人生そのものも「我が世誰ぞ常ならむ」で、一人として永遠に生き残る者はありませぬ。其死の襲うて来るといふことも無常迅速と申しまして、いつ来るか分らない。それ故に古人も「後の世と聞けば遠きに似たれども知らずや今日も其日なるらん」と詠んで居ります。古來聖賢偉人程、左様に人生の儚ないことを常に看破つて居ります。平凡人程人生に酔つて居るから、生死無常といふことを忘れて了ふのであります。

現代の文化は死を忘れて居る文明であります。生存権を主張し、パンを與へよと騒いでも死の問題は忘れて居ります。死んで了へばそれつきりではないかと、死といふことを實に粗末に考へて居ります。今日の識者の中にも此大切の問題を殊更に回避し、只管肉體の榮養を求めて一日の生を費らんとする者がある。古今の聖者哲人と言はれた人は、必ず死の問題を捉へて居る。「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」といひ、或は「生を捨てて義を取るものなり」といひ、或は「我不愛身命但惜無上道」と申して居ります。現世に酔うて居る人には「色は香へど」といふ所だけで「散りぬるを」といふ所は分らぬ「我が世誰ぞ常ならん」などと申したならば、逃出して了ふでありませう。「いろは」の二行とは行けないのが今の有様であります。有爲の奥山にでも行つたならば、山の裾をぐる／＼廻つて居るのみで、一步でも上に登らうとしないのが彼等の生活である。之を小我の生活と申して居ります。茲に人生觀を打立て、有爲の奥山を

今日越へようといふことになつて来る。有爲と申すのは遷り變つて行く儚ない人生を示し、其有爲轉變の迷ひの人生を高い山に譬へ、其山を越へるにしましても明日とは待たない。況してや死んだ後ではない。即今只今發心と同時に越へるといふことを「今日越へて」と申すので、釋尊は「頭燃を拂ふが如し」と申して、頭に火が移つたならば誰でも直に之を消すやうに速に越へなければならぬと申されて居りますが、此勇猛精進が日本精神の特色である。「善は急げ」と申して居ります。現在生活が大切である。現在生活が完全に行きさへすれば、死後は必ず光があります。さうして「淺き夢見し酔ひもせず」で、人生に酔拂ひ掛けて居つたけれども、深く陥らないで「遷滅無常は昨日の夢、菩提の悟は今日の現つたるべし」で、其夢が醒めて、無始無終の我といふ大我が分り、現在に於ては信仰法悦の生活が開かれ、死後は永遠の榮光に就て行く本當の人生を見透した所の精神生活に入つて行くから、そこで「京」の都に達することが出来るといふ人生に凱歌を擧ぐるといふ意味に於て、「京」の字は輝いて居るのであります。不生不滅の我である我は無限の生命を持つて居る。智慧もあり、慈悲もあり、洪大無邊の働が出来る妙體である、こゝに自慶安住といふことが分るのであります。かゝる妙體にして不幸病に罹つたならば唯々物質的療法だけでは直らぬ必ずや精神的療法を加味しなければならぬといふことが判ると思ふ。今日の醫術は邪道に落込んで居りはしないか、唯物質的に、人間もモル



モットも同じに考へて居る所に大きな間違ひを生じて來たと思ひます。深く省察せねばならぬ。今茲に現はれて居る肉身だけを我だと思つて居るから小我と申すのである。全體の我、即ち大我に立つことに依り初めて奥山を越へることが出來るといふのであります。

諸行無常といふのは萬物流轉と同じ思想でありまして、山でも川でも人間でも形あるものは總て壞れて行く、是れ生滅の法で果敢ない所のものである。法華經に「衆生劫盡きて大火に燒かるゝと見る時」といふのは、此世界が幾億萬年の後に燒けて星雲になる時であります。非常に遠いこと迄も言つて居るのであります。而かも「我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」と申して居りますが、是は法華經の有名な文句でありまして、我此土安穩と申して、唯ぼんやりと天とか宇宙とか申さない。又十萬億土の淨土とも申さない。この「我此土安穩、天人常充滿」と言ふのは、その遷り變つて行く、其の奥に不滅の我、實在の世界といふものを認識して來た時に、即ち「生滅滅し已つた」時に、眞の安心と、幸福がそこにあるのである。斯る立派な精神を拓いて行くのを「寂滅を樂と爲す」といふのであります。然るに昨晩もある會で佛教は「寂滅を樂と爲す」などといふて居るが、何といふ消極的な厭世的思想ではないかと攻撃されて居た人がありましたが、斯かる立派な精神を拓いて行くのを「寂滅を樂と爲す」といふのであります。非常に積極的な樂天的な意味を持つて居るのであります。常ならざるものを

常と考へ樂ならざるものを樂と考へ、我ならざるものを我と考へ、淨からざるものを淨しと考へると云ふことの誤謬を訂正して、眞の常樂我淨を求めなければならぬ。どうも「いろは」歌は非常に難かしい意味が含んで居るのであります。「三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は寶土なり寶土何ぞ壞れんや」といふあの不滅の世界、久遠の昔から盡未際に到る迄常住不滅である所の實在であり眞理である所の世界、之を吾々の祖先は高天原と申したのであります。

此高天原を持つて來て現實の世界に其影を宿して來たならば、そこに日本國家の安泰と無窮に彌や榮へる根柢が立つ譯であります。本地垂迹とは斯かる意味を持つものであります。印度が本で日本が迹だなどといふのではないのであります。一つの理想世界を築き上げて其影が映つたのが日本である。是は非常に深遠なる思想であるのであります。「いろは」歌は獨り個人の完成を歌つたものではない。楠公が七生報國を誓はれた如く、國人擧げての完成であり國土成佛、寶土實現を意味し、總て全世界を修理固成せんとする日本精神の光揚であるのであります。

明治天皇の御製に

しのびてもあるべき時にともすれば

あやまつものは心なりけり  
 ふきまよふ風にまぎれて東とも  
 西ともわかぬかねのおとかな  
 しづかなる心のおくにこえぬべき  
 千年の山はありとこそきけ

此「しづかなる心のおくに」こえぬべき千年の山といふはうゐの奥山を指され、心の奥にある大きな山を越えなければならぬと仰せになつて居るのであります。

#### (四) 高御座之業

今を距る千二百年前皇紀千三百七十年、元明天皇が和銅三年、平城京に御遷都遊されましてから、桓武天皇御即位迄、七代七十年間に亘る所の奈良朝時代は我が國史の最も光輝ある頁を展開しまして、國體觀念の最も透徹せる時代でありました。應神天皇の御代、王仁が参りまして漢籍を傳へせしてから、五百年を経過し、又欽明天皇の御代百濟の聖明王が佛教を傳來せしめてから百五十年を過ぎまして、是等の外來文物は、幾多の賢哲に依り、就中聖德太子様の御叡智に依り、完全に日本文化に融合歸一せられ、其結晶實現である所の大化の革新及び大寶律

令の制定に依る、國體的政治體制完成の後を承けた時代でありました。支那歷代の中にも隋唐の時代といふのは、最も燦爛たる高級の文化を成すものであります。飛鳥朝百二十年間に於きまして、我國の文化は有ゆる點に於て隋唐の文明と平等の地位迄進んだのであります。斯くして奈良朝時代には、日本國體の神典とも申すべき古事記、日本書紀が作られ、我國地誌の初めである所の風土記が成り、又漢文學には懷風藻の編纂があり、又柿本人麻呂、山部赤人、山上憶良、大伴家持などの歌聖が輩出しまして、世界に誇る萬葉二十卷四千五百有餘首の大集成が完成し、建築美術、工藝等天平文化として後代に燦然たる光を投じた偉大なる文化の躍進は、單なる文化の爲の文化にあらずして、其一切の樞軸は國體意識の強大なる現はれであつたのであります。萬葉集の歌は最も能く之を現はして居ります。柿本人麻呂は「おほきみは神にしませば眞木の立つ荒山中に海を成すかも」と熾烈なる國體精神を吐露して居ります。山の中にでも海が出來ると大君の御稜威を稱へたのであります。又彼の海犬養岡麻呂は「御民吾生ける驗しあり天地の榮ゆる時に遇へらく念へば」とて御稜威の盛んな大御代に産れ遇うたことを思ふと、洵に歡喜身に溢れ、天皇の御民の一人である自分は、眞に生甲斐のあることであると、如何にも精神の充實した所の歌を遺して居ります。更に其當時に於ては勿論現在に於ても世界最大の木造建築物たる東大寺の建立（是は今日では一億圓掛けても出來ない程の建築物ださうであります）

と、又起工から背光の竣成迄前後三十六箇年の長年月を費した大盧舍那佛の造立とは、我國が最勝國土たる理想信念を遺憾なく表現するものと申すべきでありまして、支那にも印度にもない所の大銅像を造らんことを計畫し、それを成し遂げた當時の藝術家の意氣は實に熾んなものでありまして、支那も印度も最早眼中になかつたのであります。

大化の改新以降天智天皇様の御定めになつた法制の精神を窺ひまするに、其主要なる眼目は天皇の御大權の確立といふ事でありました。國體明徴といふことであつたのであります。所謂「天に二日なく國に二王なし」といふ此御精神を歴朝相承けて傳統的理想とされたことは、天皇の即位の大禮に讀上げらるゝ所の宣明の中に、讓位の際必ず先帝から新帝に向つて、天智天皇様が萬世迄も改むることなき常典と御立てになつた法制の儘に皇太子に御授けになるといふ意味を仰せになるのが、殆ど御定例となつて居つたことでも知ることが出来ます。天智天皇の御遺策は奈良朝、平安朝時代を通して強く流れて居りまして、神武天皇の事を申さぬでも天智天皇を中興の祖と仰いだといふ位に、此大化の改新に依つて我國は建直しが出来たのであります。でありますから大化改新の精神が奈良朝時代迄擴充されて居つたことは申す迄もないのであります。道鏡事件の如きも當時の勢力争ひの纏れで、何か別に深い原因が存したと見るべきでありまして、皇權が失墜したといふ所からではないのであります。其結果天皇の御親政と

なり、天皇御自身に大政を御總覽なされ、太政大臣、左右大臣は大政を輔佐し奉るに過ぎなかつたのであります。太政大臣といふのは總理大臣とは少し資格が異なるのであります。其外に左右大臣があつて、左大臣が上奏を申上げ、右大臣が下達することになつて居つたと思ひます。唯太政大臣は制度の上では天皇の御師範として、陰陽をも變理する程の人でなければならぬとされて居た丈に、容易に斯かる偉大なる人物を得ることが出来ないで、其人なければ開けよと見えて居りまして則關の官と言はれた。故に必ず皇族を以て之に充てられ、而も知太政官事といつて、太政大臣事務取扱の如きものに止められて居り、其祿は右大臣に準じて賜つたものであります。既に天皇が國土に君臨せられる御一人であらせられるから、當然此國土を親しく統一されなければならぬ。古代に於て皆さうであつたのであります。後に至つて大權が權臣の手に歸して君臣間の分裂を來すに至つた。それを古に復すことが改革である。斯かる思想は我國では何れの時代にも政局の行詰つた時期に必ず擡頭して改革の原動力となつて居る。今昭和の御代に於て國體明徴論が出て居るといふことは、やはり改革の原動力として現はれて居る譯であります。それから天皇陛下と申上げるのは直接拜謁した時に限られるので昔は如何なる人でも直接奏上は出来ないで、「陛下」と申上げたのであります。併し今は一般に「天皇陛下萬歳」といふやうに唱へて居りますから、特に改める必要もないのであります。伊藤公

辭は常に「天皇萬歲」と申されたようですが、やはり是は陛下といふことは直接拜謁の時に申上げる言葉であつて、遠くに居つて申上ぐる言葉ではないといふことを申されて居たさうであります。併し今日は慣習になつて居りますから、天皇陛下と申上げても差支ないと思ふのであります。

大化の改新に於て中大兄皇子の上奏文に「昔在の天皇等の世に天下を混齋へて知したまふ。今に及びて分離れて業を失ふ、天皇我皇萬民を牧したまふべき運に屬りて、天も人も合應て厥政惟れ新なり」と仰せられて居ります。天皇の御大權が御手から離れて居るといふことはいけない。今や維新の業成り、天皇親政の運に際會し、天も人も感應して諸政一新を見るであらうとの意味であります。天皇の御大權は之を三つに分つことが出来ます。第一が祭祀の大權、皇祖皇宗を御祭り遊ばすのは御親祭でなければならぬのでありまして、外の方が代はることは出来ぬ。御代拜はありますが、御祭りの時には必ず御親祭でなければならぬことになつて居ります。武家が政治を取つた後も此御親祭だけは必ず行はせられたのでありまして、祭祀の大權は常に離れなかつたのであります。次は政治の大權と統帥の大權であります。政治の大權も統帥の大權も祭祀の大權から出て來るのであつて、歸する所三種の神器として、政治の大權は勾玉となつて現はれ、統帥の大權は御劍として現はれて居りますが、御鏡に勾玉も御劍も歸一

するが如くに、統帥の大權も政治の大權も、祭祀の大權に發源して居るのであります。斯くの如く我國に於ては祭祀といふことを重く視て居るのでありまして、祭祀から萬機が出て來るのであります。即ち天照大神様に還ることに依つて、初めて治しめすといふことが現はれて來る。それ故に日本に於ては祭政一致というても宜しいが、祭政征一致であるのであります。

全國の統一は一面版圖の擴張となると共に他面には中央集權とならざるを得なかつた。斯くて天皇の御大權は和戰共に之を決せらるゝのでありまして、出征に當つて將軍に節刀を賜はるを例となし、天皇は一國の元首であると同時に大元帥であらせられたのであります。更に天皇の御尊嚴を加へ又政治機關の膨脹に應ずる爲には大皇都の經營が必要となつた。即ち奈良の都の經營となつたのであります。大化の改新の行はれた孝徳天皇の瀬波の長柄豐碕宮は實に唐の長安にも匹敵されたものであります。長安といふのは今の西安であります。當時に於きまする最新式の大皇都の最初のものであります。而して平城宮の制を見まするに内裏が北の方にありまして、政を執りまする朝堂は其右に寄つて造られてあります。是は天皇親政と併せ考ふべき興味ある事實であります。斯くして政治上の中央集權が出來まして、日本全土が悉く統一せられたが、宗教の方面に於ても思想統一を圖られたのであります。當時佛教が非常に盛んに行はれ、奈良七大寺を初め寺塔の建立も尠からず行はれましたが、其中當時の宗教上に於て最

も重要な關係を持つて居るものは國分寺と國分尼寺であらうと思はれます。國分寺も尼寺も地方の國毎に建てられたものでありまして、各地方の民衆教化機關として文化的向上を圖られ。其全部を中央の法華寺と總國分寺たる東大寺に於て統一せしめ、以て之を宗教上の中央機關たらしめ給うた。即ち奈良の法華寺が尼寺の總本山であり、東大寺が國分寺の總本山であるのであります。而して東大寺は管に總國分寺といふに止まらず、聖武天皇の御理想は世界の人が來詣すべき一大戒壇たらしめんとする爲の建立であつたのであります。即ち聖武天皇の御理想から言へば大盧舍那佛は日本の國體を表現し臺座に無數に刻まれてある佛體は、臣民即ち大御寶を現したものでありまして、世界の人が來詣するといふ一大戒壇を御造りになつたのであります。今奈良公園の心臓部に自動車道路を貫通するために聖地を破壊し、あの自然林を伐るなどといつて騒いで居りますが、奈良の古蹟を壊す人があるならば、其人は吾々の祖先の魂を傷ける人と云はなければならぬ。今日の役人などといふものは當面の事に没頭して、古の文化といふことを忘れて居るのであります。而して當時民間に於ては法華經、金光明經、仁王護國般若經、大般若經、藥師經等が多く讀まれ、是等は何れも皇室の御安泰、國家民人の安寧幸福を來さしめるといふ爲であつた。而して男僧は積極的に鎮護國家を祈願し、尼僧は消極的に懺悔滅罪に依り國民の利益を増進せしめられた。護國と滅罪とは此時代の佛教信仰の中心思想でありまし

た。又塔を造るといふことは法華經寶塔品の思想から出て居るのでありまして、其塔の中には法華經を收められたのであります。又各地方毎に國分寺と共に地方廳を置かれ、別に鎮守として神社もそれ／＼建設せられました。詰りお寺があり、地方廳があり、神社があつたのであります。此三つが一體となつて、天皇の大御心を其儘津々浦々に及ぼされたのでありまして、中央集權と地方分權の制度を巧みに配合せられ、管に中央都會に居住する者のみでなく、日本全國を通じて平等に皇恩の治からんとする御精神の現はれでありまして、國民を視ること赤子の如しといふ有難い大御心を拜する次第であります。聖武天皇の皇后は藤原不比等の第三女でありましたが、臣下から皇后の位置に御就きになつた初めての御方であります。非常に偉い御方でお身體から後光がさして居つた爲に光明皇后と申上げたのであります。此光明皇后が悲田院や施藥院等の慈善事業を御興しになつたのも、又全く此精神からであつたことは申す迄もありません。光明皇后は御自身癩病患者を御世話遊ばされたと傳へられて居ります。當時天皇の御天職を高御座之業と申上げ、皇都は四海の府となり、萬國の朝宗すべき所と考へられたのであります。

#### 聖武天皇御製

ますらをの行くとう道ぞおほろかに

思ひて行くなますらをのとも

東海、東山、山陰、西海に節度使を遣はされる時の御製で、卿等が任命せられた役目は大丈夫たるものゝ當に行くべき道であるぞ、ますらをの友よ、おろそかに思ひそ立派に任務を果して歸れとの御意である。

併しながら物盛んならば弊自ら生じまして、僧侶の地位が高められ、臆と國政を議するの機会を興へらるゝに至りまして、其處に國體の危機が孕まれたのであります。幸にして藤原百川、和氣清麻呂兩公の如き忠臣が出で、鮮やかなる方向轉換が行はれ、魔道に陥らんとした佛敎も之に依つて正しき軌道に引戻され、榮光耀く平安時代の文物が、桓武天皇の御即位と共に展開し、文化の新生面が生まるゝことになるのであります。

明治天皇の御製に

いにしへのふみ見るたびに思ふかな

おのがをさむる國はいかにと

まぢかくもたづねし民のなりはひを

こよひ旅ねの夢にみしかな

照るにつけくもるにつけて思ふかな

わが民草のうへはいかにと

みちくにつとめいそしむ國民の

身をすくよかにあらせてしかな

くにたみの業にいそしむ世の中を

見るにまされる樂はなし

是れ即ち高御座の御業であります。外國の君主大統領に斯かる御製の如き氣持を持つた者があつたでありませうか、然るに此國體を有難いとも思はない者が吾々の同胞の中にあるといふやうなことは、洵に悲しむべきことであります。三千年も長養され御恩を受けたことがどうして分らぬのか、斯の如き恩を知らざる者は正に禽獸といふべきであります。昔は三代の御恩といつたが、吾々は數千年來悠久の御恩を受けて居るのであります。此君恩に對して感激することがなかつたならば、其人は化石の如き者と言はなければならぬのであります。

### (五) 皇軍の私兵化

我國の歴史を文化全體の特長から考へて古代、上代、中世、近世、現代の五期と分けて考へて見ますと、上代は推古天皇から始まり、保元大亂の前年に終るのであります。此時代に於き

ましては日本本來の姿がはつきりと現はれて居りまして、一般に國體觀念は正確であつたと云へます。是は申す迄もなく聖德太子の御力に負ふ所が多く、太子の御理想を繼がれた大化改新の精神と制度とが上代を通じて流れて居たからであります。然るに其後此大改革の精神は數百年を経て殆ど忘却され、延喜天曆の前後から大變化を來すに至つたのであります。それは宇多天皇の寛平年間に至りまして遣唐使を廢せられし以來、外國の刺戟に依る國家意識も薄らぎ、又朝廷に於ける國史の編纂も延喜元年に三代實錄が出來た後は止んで了つた爲に、國史の反省に依る國體觀念も段々素れて了つたのであります。搗て、加へて支那の讖緯の説傳はり（讖緯といふのは易のやうな思想であります）又佛教の末法思想と百王思想とが曲解誤信せられまして、天壤無窮の皇運に對する國民的信念に動搖を生ぜしむるに至つた。それに學問といへば支那學のみを主とし、支那史に通じて我が國史を捨てて顧みない。大江匡房のやうな博學を以てして、日本書紀を十分に讀んで居らない。又文學を好める國司の女にして天照大神の如何なる神であるかを知らなかつたといふ有様でありました。藤原良房、基經以來政治の大道素れ權勢下に移り、其重要な土地制度は大化改新に於て原則として之を國有と定め、恣に兼併することを禁ぜられたのでありましたが、村上天皇以後次第に豪族の土地兼併を生じた爲め、後三條天皇が攝關の權勢を制し、記録所を設けて莊園の整理を行はんとせられました。其御理想を

達成すること能はずして崩御遊ばされ、其後はひた崩れに崩れて、上代の末には莊園の數は莫大なるものとなり、國有は何程もない有様となりました。斯様な私利私欲の爲に、上下の結托が人と人との間に行はれて、茲に私的主従關係が段々生ずるやうになり、其弊害が武士間に及びまして、天皇の勅命を仰ぐ皇軍の本來の性質が失はれ、私兵の姿となつたのは一は兵の制度の上から來たのであります。根本は君臣の大義が忘れられた所から起因して居るのであります。それは保元大亂に依つて武門の勢力が伸びるに従つて決定的のものとなり、斯くて時代は中世に入るのであります。

明治天皇の御製に

しきしまの大和心をみがかずば

劍おぶともかひなからまじ

斯の如く戒められて居られるのであります。惜いかな皇軍は其實を失つて私兵となつて、統帥の大權が段々皇室の御手から離れると共に未曾有の顛倒時代が起つて來るのであります。

### 未曾有の顛倒時代

昭憲皇太后の安德天皇を偲ばせられての御歌

今もなほ袖こそぬるれわだつ海の

龍の都のみゆき思へば

四四

二位尼の辭世（長門本平家物語に據る）「いまぞしるみもすそ川の御流れ波のそこにもみやこありとは」中世時代と申しますのは皇紀一千八百十六年保元大亂から二千二百三十二年天正元年室町幕府滅亡に至る迄、凡そ四百十七年間を指すのでありますが、我國の姿が最も素れ眞實の國體は人間の煩惱の蔭に隠れて、慾望に依つて生ずる第二觀念が國民を支配した時代と言ひ得ると思ひます。是が假に外の國であつたならば當然國家は滅亡し、文化は喪失したであらうと思はれる不祥事の連続した時代でありまして、日本國民は生きながら無間地獄に投ぜられたのであります。甚だ悲しむべき時代ではありましたが、個人も人生の苦を舐めて起立つた者でなければ、眞實の人格を鍛へ上げることが出来ないと同じやうに、日本國家も此中世時代の大試煉を受けて、明治回天の偉業を開き、爾後の世界的躍進を遂げ得たとも言ひ得ると思ふのであります。中世時代を劃期した保元の大亂は、上代の積弊が一時に決潰爆發したものであります。其直接の原因は院政にあつたのであります。元來院政といふものの目的は、藤原氏攝政關白の權政を抑壓する爲でありましたが、それが遂に院と院との御争ひ、天皇と院との御對立となり、其爲に王朝の衰微を來し、却つて武士階級に乗ぜられて、平氏の專横を誘致し、源平七

年の私闘となり、畏くも安徳天皇様には賣算僅かに八歳にて壇ノ浦にて崩御遊されたといふ事は、開闢以來の大變事でありまして、時の人をして「天下忽に滅亡せんとす悲しむべし悲しむべし」と歎かしめたのでありますが、次で木曾義仲の僭恣と其滅亡、鎌倉幕府の創設と隆昌となりまして、頼りなき人生の有爲轉變の激しさを示しましたが、其頼朝の幕府開設こそは政治の實權と兵馬の實權とを完全に京都から鎌倉へ、天皇より征夷大將軍へ、後には北條執權へ移し參らせたものでありまして、我が國體上許すべからざる未曾有の大失態でありました。

源頼朝は宮闕守護の大任を打捨て、遠く鎌倉へ覇府を開き、遂に政治の大權を涼奪し參らせし罪科は、安徳天皇の崩御に對する責任と共に何としても免るゝこと能はずして、彼自ら非業の最期に斃れたのみならず、二代將軍頼家は伊豆の修善寺の浴槽に於て慘殺せられ、續いて三代將軍實朝は忠義の志篤かりしにも拘らず、父祖の罪業を償ふに由なく源家氏神の社前に於て無慘の横死を遂げ、源家三代敢なく亡んで了つた。實朝卿は流石に幕府の存在を痛く歎いて「ひんがしの國に我居れば朝日さすはこやの山の蔭となりき」自分が東の鎌倉に居れば、箱根の山の蔭になつて朝日が京都の方にさゝぬやうになると歎いたのであります。

併しながら一般幕府の人々殊に其中心勢力たる北條氏は、幕府の權力を固めることに全力を擧げて、朝廷は衰へる一方であり、武士の忠義は天皇に對し捧げ奉ることを忘れて、専ら鎌倉

四五



將軍、次いで執權に捧げられ、「いざ鎌倉」といふ言葉で示されて居る如く、日本の中心が京都から權勢の府たる鎌倉に移つてしまつたのであります。皇運に何の確信もなければ、前途に少しの光明も認められない世の中となり、ひた衰へに衰へて行く所、國家の誇も感ぜられないのであります。全國の重苦しき空氣の中に、承久の御事擧げが起り、而も皇軍脆くも敗退となり、懿て三上皇様の播遷となつて、大義は愈々否塞することとなり、開闢以來未曾有の顛倒時代が現出したのであります。

此北條氏の惡逆無道に對し最も痛烈に鎌倉幕府を目前に攻撃筆誅したのは立正大師であります。大師は承久三年の翌年、貞應元年二月十六日の生誕で、大師一代の活動は承久役に對する恐懼痛憤に發すると云ふも決して過言ではないのでありまして、言々誠忠の念躍如として居ります。

「四天下の中に二つの日なし、四海の内豈兩主あらんや、月は西より出て東を照らし、日は東より出て西を照す、佛法必ず東土の日本より出つべし」(顯佛未來記)

「隱岐の法皇は天子也、權の太夫殿は民ぞかし、子の親をあだまんをば天照大神うけ給ひんや、所從が主君を敵とせんをば正八幡は御用あるべしや」(種々振舞鈔)

「一切の大事の中に國の亡ぶるが第一の大事にて候」(蒙古使書)

「日本國の天子は天照大神國御魂の入りかわらせ給ふ方也」(高橋入道返事)

「天下第一先代未聞の下刻上出來せり」(下山書)

「日本國に代始まりてより已に謀反の者三十六人第一は大山の王子乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時也、二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝す。二人は王位を傾け奉り國中を手に擧る。王法既に盡きぬ」(秋元鈔)

「伊豆の國の民たる義時が下知に隨ふ故にかゝる災難は出來する也(中略)今に六十年の間未だその恥をすすがすところ見え給へ」(富木入道返事)

「皆其君を貴み其親を崇むといへど豈天子にまさるべきや」(持法華問答鈔)

斯くの如き大師は非常に強く北條氏を攻撃して居ります。それが鎌倉幕府に向つて出した二度目の諫曉一昨日御書には一言に能く此間の國情を道破して居りますが、此御書の爲に龍の口の大難となるのであります。「方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴む」と申して居ります。内斯くの如く顛倒して居るから「近年の間多日の程大戎浪を亂し夷敵國を伺ふ」と言はれた如く、其當然の應報として他國侵逼難たる大蒙古來が生起し、國家の安危存亡眼前に迫つて來たのであります。

後鳥羽天皇御製

おくやまもおどろが下もふみわけて

道ある世ぞと人に知らせむ

昔にはかみも佛もかはらぬを

くだれる世とは人の心ぞ

千早振る神ぞ知るらむふして思ひ

おきてかぞふる萬代のおく

夜をさむみ闇の袞のさゆるにも

わらやの風を思ひこそやれ

土御門天皇御製

つらしとて人をうらみむゆゑぞなき

我が心なる世をばいとほで

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ

ことわりしらぬわが涙かな

順徳天皇御製

人ごゝろみたらし川の清き瀬に

すみにごれるも神やわくらむ

奥山の柴のした草おのづから

道なる世にもあはむとすらむ

(終)

昭和十三年四月二十日印刷  
昭和十三年四月廿五日發行

非賣品

發行兼編輯人 辻

信

一

印刷人 中山

廣元

元

印刷所 中山

印刷社

社

發行所 明

朗會本

部

東京市芝區新橋二ノ三〇中和ビル  
電話銀座座一八五番 五〇一一番  
振替口座東京一三八四七八番

終

2  
5